

## 日露作家会議〈モスクワ—東京 2001〉を振り返って

毛利公美

私は今、テルミン奏者やの雪さんのファースト・アルバムを聴きながら、札幌でこれを書いている。窓の外では重く湿った雪が、過ぎてゆく時の流れのように、音もなく降り積もってゆく。東京で日露作家会議〈モスクワ—東京 2001〉が開かれてから一年半。まるで遠い昔のようだ。だが、音楽には味覚と共に記憶を呼び起こす力がある。ロシア生まれの科学者テルミンが発明した、手を触れずに演奏する 20 世紀の楽器は、科学の力というよりはむしろ超自然の力によって奏でられているように思える。人の声に限りなく近いその不思議な音色が、私を 2001 年 10 月 27 日の山上会館へと連れ戻す。私は「日露作家会議」二日目のシンポジウムが行われた二階の会場の片付けを終え、一階のレストランで進行中のレセプションを階段の踊り場から見下ろしながら、インスピレーションに満ちたやのさんの演奏に耳を傾け、この瞬間を無事に迎えることができた感慨に胸を熱くしている。この日までに重ねてきた様々な苦勞の思い出が胸をよぎる。一年近く前の国際交流基金の助成金申請にはじまり、ロシアからのヴィザや航空券の手配、ゲストとの打ち合わせ、プログラムの作成、会場の準備、通訳機器や参加者の弁当から受付のボールペンに至るまで様々なものの手配など、会議の運営は一見取るに足りぬ些細な仕事の集積であり、たくさんの人々の努力と気遣いによって支えられている。何気なく張られた案内の紙ひとつ取っても、その影にはその文面や配置を考えて作った人の手があるのだということを、実際に自分がやってみるまでは、なかなか気づかないものだ。

その日は朝から大変な緊張の連続だった。朝十時から作家会議メインのイベントであるシンポジウムが行われた山上会館の大ホールは、定員をはるかに上回る聴衆で一杯だった。会場据付の椅子はもちろん、数の足しにと手伝いの学生たちが研究室から総出で運びこんでくれたパイプ椅子（いつも授業中に学生が座るやつだ）も次々と埋まっていき、予約者に優先的に席を確保するため、受付や会場係はきりきり舞いで入場者をさばいた。資料は足りているか、マイクの音量は充分か、何より作家たち（とりわけ我々を心配させたのはロシアから招かれた某若手文学批評家）はちゃんと自分の席についているか…。この歴史的なイベントを成功させようという気負いが神経を張り詰めさせる。

おまけにこの日は特別な事態が我々を待ち受けていた。運悪く、この日はめったにない電気系統の点検が行われることになっており、夕方 5 時からしばらく一切の電気が使えなくなるというのだ。停電の時間は点検の様子次第だというのが、10 月末の 5 時といえども

う真っ暗だ。我々は苦肉の策でレンタルの発電機を用意して備えた。燃料のガソリンも満タンにしたし、稼働の手順も確認済み。会場と廊下の数箇所にはライトを配し、受付には懐中電灯も準備してある。万事抜かりないはずとはいえ、夕刻の時間が近づき、辺りが次第に暮れてくるに従って、裏方の緊張は募る。

そうこうするうち、レセプション会場となる階下のレストランでは、津軽三味線の佐藤さんとお弟子さん二人との音合わせが始まった。現代の津軽三味線界の第一線で活躍する佐藤さんの演奏は、ダイナミックでものすごい迫力だ。リハーサルが始まると、レストランにはジャンジャカ、バリバリ、大音響が響き渡った。驚いた会館の人が飛んできて、「ちょっとちょっと、大きな音を出しては困りますよ」とおっしゃる。実は山上会館で演奏活動することは禁止されていたのだ。だが、安いギャラにも関わらず快く演奏を引き受け、忙しい中、時間を割いて駆けつけてくださった演奏家の方々に、そんなことが言えるわけもない。「上でまだ会議中ですので、もう少し音を小さくできませんか…」と遠慮がちにお願いし、会館の方にはひたすら詫びて許してもらおう。このときばかりは、停電のおかげで助かった。「不便をおかけしたし、こんな事情で今日は他に誰もいませんから、まあいいでしょう」というわけだ。

停電は予告どおり、5時ぴったりに始まり、会場係はリハーサル済みの完璧なチームワークを発揮して、発電機を回した。一瞬後、会場は投光機の黄色い光に包まれ、壁にはスポットライトを浴びた作家たちのシルエットが映し出された。感動的といっているほどの光景だった。

だが感動は長くは続かなかった。おそらく30分間程と言われた停電は、なんとわずか5分ほどで終わってしまったのだ。百戦錬磨の沼野先生は、こんなことだと思ったよと苦笑していらっしゃったが、私はせっかくの苦勞があつという間に役立たずになってしまった悔しさに、停電が早く終わったことを喜ぶどころか、もう一度消えてくれればいいのにと、白々とした蛍光灯の光をつい恨めしげに眺めた。

会場ではそんな思いもよそに、復活した灯りの下、白熱した議論が続いた。結局、プログラムを一時間ほども延長して、会議はレセプションが始まるぎりぎりの6時過ぎまで続き、司会の沼野先生の提言によって、最後にガンドレスキーが詩を朗読した。しんと静まった会場に、詩人の声が浪々と響くと、その少し前の「エリート文学」の定義についての議論が、とてもつまらないものにさえ思えた。詩人の声は、雄弁に語っていた。良い文学とは言葉で編まれた天上の音楽であること、文学のすばらしさを理解するためにしかつめらしい議論は必要なく、ただ心の耳を澄ませてその言葉を受け入れればよいことを。

こうして、ロシア文学に新しいエピソードが付け加えられた。長く偉大な文学の歴史の中で、それはとても小さな取るに足りない出来事に過ぎない。しかし、そこに私たちがい

てそれを共有したという事実によって、その出来事は特別な意味をもっている。そこにはむしろ、現代ロシアで第一線の作家たちと生の対話を持ちえたという、いささかミーハーな喜びもある。マスコミにも大きく取り上げられ、参加者からたくさんの嬉しい反響をいただき、ささやかではあるが意味のある仕事をやり遂げたという充実感も得られた。雑誌「早稲田文学」やロシアのウェブサイト (<http://www.susi.ru>) 上で公開された会議の詳細は、これからもそれを読む誰かに刺激を与え続けるだろう。今回の作家会議にまつわる体験が作家たちの手によって作品となり、日本やロシアの文学にさらに新しい歴史を紡いでいくという期待もある。しかし、作家会議を通して得られた最も大切なものは、そうした具体的な形をもった結果ではなく、おそらく文学そのものの価値にもつながる、目に見えない何かだ。実益には遠く無縁であっても、人の心を動かす大きな力をもつ、文学という不思議なものの価値に。

### 〈付録〉「作家会議」の開き方（ひとつの提案として）

こういった会議の運営には、準備段階から会議が終わった後まで、やらなくてはいけない細かな手配や作業が無数にある。ひとつひとつの細かな仕事はそれぞれが密接に関連し合っており、全体を把握していなければ何もできない。今回も事前の準備や手配を進める中で、たくさんの仲間が協力を申し出てくれたのはとてもありがたかったが、こちらもこうしたイベントは初めての経験である上、なにぶん時間的に切羽詰っていたため、計画的に仕事を進めることができず、行き当たりばったりで、やりながら「そうだ、あれもやらねば！これもやらねば！」とあたふたしていたのが現状である。わざわざ誰かを呼んで使い走りを頼むのも気が引けるし、その都度きちんと説明している余裕もない。いっそ自分で全部やったほうが手っ取り早いということも多かった。もっと早い時点で人を募り、参謀本部のようなものを作って会議の詳細を全て話し合っただけで決めて分業していれば、おそらくはるかに効率よく楽に進められただろう。

というわけで、今回の反省をふまえて、今後のための提案として、こういった会議を開く際に必要な作業をリストアップし、いくつかの係に分けて仕事の分担の案を作ってみた。

会場：シンポジウム会場の予約、会場の下見と会場設営計画の作成、設営に必要な物（立て看板・発言者の名前を書いた垂れ幕・受付等の案内の紙）の用意、通訳機器の手配と受け取り、会場設営の指揮、発言者のための水とコップの用意、休憩室のお茶とお菓子の用意、レセプション会場とメニューの選定と予約など

受付：参加希望者に対する対応とリスト作成、名札作成、受付で必要なもの（領収書、筆記用具、印鑑、印肉、メモ用紙など）の準備、当日の受付作業の指揮（アルバイト学生の時間割作成と指示、アルバイト代支払い）、レセプション受付など

渉外：ヴィザ・航空券の手配に関する書類作成、ゲストとの打ち合わせ、ゲスト宿泊先・食事・送迎の手配、来日後の世話や観光スケジュールの作成、それぞれのゲスト担当者のまとめ役、シンポジウム当日の弁当の手配、来客へのお茶出しなど

会計：準備段階からのすべてのお金の管理と計算、当日のおつりの準備、レセプション会費の集金、各種支払いの清算、会計報告書の作成。当日、書籍の委託販売や資料集の頒布などがある場合の対応など

記録・広報：資料集・プログラムの作成、アンケート用紙作成、送付用案内（案内の文面、簡略版プログラム、会場案内の地図）の作成と送付、当日の記録（テープ録音の準備と確認）、取材への対応など

手元に残った不完全な記録とおぼろげな記憶を頼りに作ったため、抜け落ちていることもあると思う。また、今回の作家会議では、停電やレセプションでの演奏など、いくつかの特別な事情があったが、これは通常はないはずのことであるため、作業のリストには入っていない。それぞれのイベントにはそれぞれに異なった事態や状況がつきものである。それはその都度、対応を考えるしかないし、上に挙げた分担はもちろん、ひとつの案にすぎない。会議を滞りなく進めるためには、運営に関わる一人一人が想像力と創造力を発揮し、何が必要かを考えて積極的に動くことが求められる。

我々はどうしたイベントについてのプロではない。我々がなすべき第一のことは研究であり、学問である。そうした中で、こうしたイベントを催すことの意味を問う声もあろう。むしろ、この会議を準備するためにかかった時間を全て書齋で本を読むことに費やすこともできた。また、裏方として駆け回っていると、セミナーやシンポジウムを落ち着いて聞くこともできず、終わった後に参加者たちに話の内容について質問をぶつけることもできない。満足げに話を聴いている同胞の姿を目にすると、苦労ばかりの裏方の役割に徹することの理不尽さも胸をよぎる。しかし、文学研究者の仕事のひとつが文学の魅力を伝えることだとすれば、こうしたシンポジウムの企画もまた、論文執筆や翻訳や教育活動と並んで、大きな意味をもつものだ。

今回招かれたのは、現代ロシア文学の第一線で活躍する作家・批評家である。彼らと生の対話をするには、活字からは決して得ることができない大きな刺激を与えてくれた。それは特に現代文学に関心をもつものにとっては、またとない機会だったと思う。（今回のロシアからのゲストの顔ぶれを見て、これだけのメンバーが一堂に会することは、おそ

らく他のどこでもあり得ないだろうと言われた。) 現代文学に直接かかわりをもたなくとも文学を研究するものにとって、また文学にかかわりをもたなくともロシアに関心を抱くものにとって、あるいは特に直接の関係を何ももたないものにとっても、「作家会議」はそれぞれに異なる何らかの示唆を与えたのではないかと思う。当日寄せられたアンケートを見ても、そのことが察せられる。今回は日本側のゲストもたいへん豪華だったので、来場者の中にはロシア文学に関係のない人も多く、それぞれの関心を反映した様々な感想が寄せられた。同じ話を聞いても、百人いれば百通りの感じ方がある。そしてその幾多の刺激を生み出したのは、他でもない自分たちの力なのだということを、我々は誇りにしたいと思う。